大寨

——農業戦線の赤旗

大寨

——農業戦線の赤旗

北京外文出版社

大寨——農業戦線の赤旗

1978年　初版発行

出版者　外文出版社
(北京阜成門外百万庄)

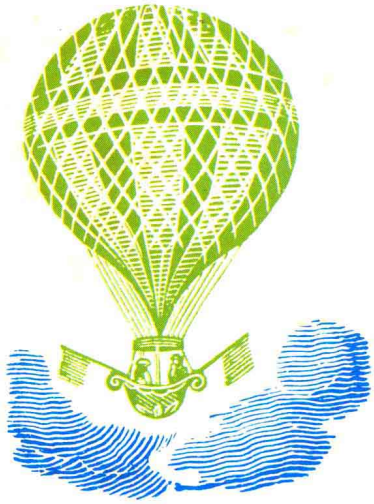
発行者　中国国際書店
(北京P. O. Box 399)

取扱店　東方書店(東京)　亜東書店(東京)
中国書店(福岡)　(株)内山書店(東京)
(株)蒲江紅(東京)　明友書店(京都)
(株)燎原書店(東京)　中華書店(東京)

編号:　(日) 8050－1794　　85—J—151P
01800

アルプス気球の旅

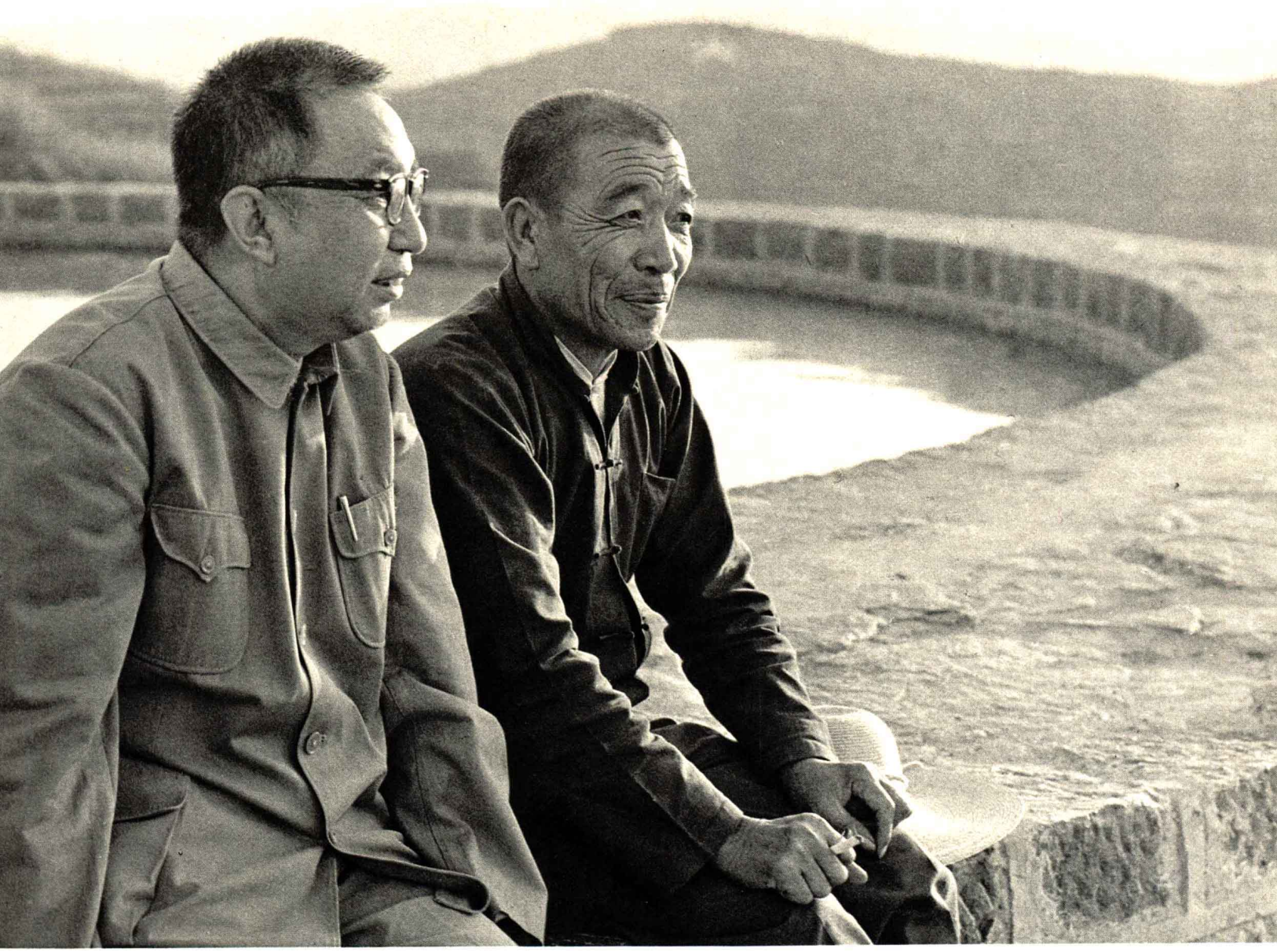
NHK取材班



日本放送出版協会

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

周恩来総理は生前、三回も大寨を視察した。写真は1973年4月、三度目に大寨をおとずれたとき、幹部や社員たちと語り合う周恩来総理



1975年9月、華国鋒同志は親しく昔陽県と大寨を視察した。
写真は陳永貴同志の案内で大寨を参観する華国鋒同志

全党动員 大办农
业 为普及大寨县
而奋斗

华国锋

1977年7月6日、華国鋒主席は写真集『大寨』のために「全党を動員して大いに農業と取り組み、大寨式の県を普及させるために奮闘しよう」と揮毫した

大 寨 の 道

中国の華北地区にある雄大な太行山脈は、黄土高原と華北平原との間を東北から西南へ走り、重なりあう峰々が綿々と幾千里もつづいて、まるで天然の屏風のようである。大寨は、この太行山脈の峰の一つである虎頭山のふもとに位置しており、標高は1000メートルをこえる。

大寨とは、山西省昔陽県にある同名の人民公社の下の一生産大隊のことで、83世帯、人口470人あまりの山村である。1945年に解放されると、この村の貧しい農民たちは毛沢東主席の教えにしたがって社会主義の農業に打ちこみ、恵まれない自然条件を改造してきた。その結果、20キロも離れたらもう知る人もなかったこの貧しい山村が、いまや全国が注目する社会主義の新しい農村に生まれ変わったのである。

1964年、偉大な指導者毛主席は、「農業は大寨に学ぼう」と全国に呼びかけるとともに、当時の党支部書記陳永貴同志を接見した。同年の12月、周恩来総理は第三期全国人民代表大会第一回会議で、大寨の経験を総括してつぎのように述べた。――「大寨生産大隊の堅持してきたプロレタリア階級の政治による統帥、毛沢東思想優先の原則、発揚してきた自力更生・刻苦奮闘の精神、国家と集団を愛する共産主義の風格は大いに提唱されなければならない」と。周総理はまた、1965年5月、1967年4月、1973年4月の三回にわたって、党と毛主席の思いやりをたずさえて大寨を視察した。1975年9月には、毛主席のあたたかい配慮のもとに「農業は大寨に学ぶ」第一回全国会議が開かれた。この会議を主宰した華国鋒同志は『全党を動員して大いに農業に取り組み、大寨式の県を普及させるために奮闘しよう』と題する総括報告をおこない、大寨の経験を全面的にしめくくった。1976年9月、中国人民は敬愛する指導者毛沢東主席を失った。10月、主席の生前の取り決めにしたがって、華国鋒同志が中国共産党中央委員会主席、中国共産党中央軍事委員会主席に就任し、いっきょに王洪文・張春橋・江青・姚文元ら「四人組」の権力さん奪の陰謀を粉砕した。この政務多忙な時期の同年12月、華主席自らの提案と党中央の決議をへて、「農業は大寨に学ぶ」第二回全国会議が北京で開催された。この大会を通じて、農業は大寨に学び、大寨式の県を普及させる運動は、いっそう新しい段階へと発展したのである。

革命的指導者と人民大衆は、大寨に大きな関心をよせ、力強く支持し、このうえなく愛護した。しかし資本主義の道をあゆむ実権派、修正主義の頭目および社会主義に反対する種々様々な敵は、大寨を目のかたきにした。かれらはあの手この手で大寨の経験を抹殺し、大寨の成果を否定し、大寨の革命と生産を破壊することによって、社会主義の道をあゆむ大寨にストップをかけ、農業は大寨に学ぶ運動を攪乱しようとした。劉少奇、林彪もそうだったし、「四人組」反党集団もまたそうであった。

だが英雄的な大寨の人びとは、ブルジョア階級と修正主義分子の侮辱と威圧をしりぞけて、30年あまりの間、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、断固として社会主義の道を前進してきた。

100世帯にもみたない山村の農民たちが、なぜこんなにも社会主義にたいして固い信念をもっているのか。それを解きあかすには、大寨の歴史をさかのぼらなければならない。

苦難にみちた歴史

700年ほど前、大寨の貧しい農民の先祖たちは、このあたりの土地を開墾しはじめた。春は耕し、夏は草取りと、朝早くから夜おそくまで働きながら、かれらはただ衣食にことかかない生活を願っただけだった。ところが、時は流れ時代は変わって、何百

年という歳月がすぎたにもかかわらず、かれらの願いは一向にかなえられなかったのである。解放直前まで、大寨は相変わらず不毛の土地しかない一寒村にすぎなかった。当時、全村の70パーセントの土地が一戸の地主と三戸の富農に占有され、かれらは法外な小作料を取り立てたり、高利貸しをしたり、作男を雇ったりして、土地の少ないまたはまったくもっていない農民たちを搾取していた。全村60余世帯の70パーセントを占める貧農や雇農は、年じゅう地主と富農の作男として働かされていたのである。

大寨の自然条件もひじょうに悪い。全村あわせて50ヘクタールほどの土地しかなく、それも4700枚以上のネコの額ほどの畑ばかりで、虎頭山の七つの谷と八つの尾根に散在している。土層がうすいうえに、水土の流失もひどい。干ばつはもちろん毎年やってくるが、雨期に入ると集中豪雨になることもしばしばあり、そのたびに山津波が起こって災害をもたらす。そのほか、病虫害、雹害、霜害、水害によく見舞われるので穀物の収穫はきわめて少なく、恵まれた年でもヘクタール当たり750キロをこえたことがなかった。

封建的なひどい搾取と抑圧、それに恵まれない自然条件のもとで、大寨の貧しい農民たちは先祖代々凄惨な生活を送ってきた。やむをえず乞食になったり、子供を売ったり、はては絶望のあまり自殺したりした人も沢山いたのである。大寨の階級教育展覧館には、当時のつぎだらけの衣服や網の目ように破れたかけぶとん、それに乞食用のカゴといった実物が保存されている。それらの実物は、当時の大寨農民たちのみじめな生活を如実に物語っており、今日の青少年たちを教育する貴重な教材となっている。同じ目的で、大寨の人びとは土地を改造したさいに、谷を一つだけわざと昔のままに残しておき、「青年教育溝」と名づけている。また、かつて貧農・下層中農が汗水ながして耕してきた地主の土地も一枚残してある。そこは当時はもっともよい土地だったが、いまでは大寨のどの土地にも及ばないのである。

1945年8月、大寨は解放され、苦難にみちた大寨の歴史にも終止符が打たれた。土地改革がはじまると、土地をもたないかまたはわずかしかもっていない農民たちは、地主階級を打倒して、土地の主人公になった。その時、大寨の農民たちの前には選択すべき二つの道があった。一つは協力しあってともに裕福になる道であり、もう一つは、個人の金もうけと自由競争をねらう単独経営の道である。後者はいうまでもなく、少数の人が富み栄えるだけで大多数の人びとが貧しくなる道であり、ただ前者のみがすべての農民を永久に貧困からぬけ出させることのできる社会主義の輝かしい道である。このことは、旧社会でひどい搾取と抑圧をうけてきた大寨の貧しい農民たちには、誰よりもはっきり分かっていた。かれらは断固としてともに裕福になる道を選び、雇農の陳永貴同志が先頭に立って大寨最初の互助組をつくったのである。

たたかいの足あと

1946年、陳永貴同志の指導で最初の互助組をつくってから今日までの30余年間、大寨では闘争が中止されたことはない。その焦点は、社会主義の道をあゆむか、それとも資本主義の道をあゆむかにあった。

最初の互助組は10戸の貧農と雇農からなっており、働き者の陳永貴をのぞけば、残りの9戸は50をこえた年寄りか10歳そこそこの子供だったので、「老幼組」と呼ばれていた。「老幼組」は労働力が不足しているばかりか農具や役畜も十分持っていなかった。そこで労働力もあり、農具や役畜もそろっていた富裕農民たちは、かれらの仲間に入ったら損をするにちがいないと考え、自分たちで「好漢組」をつくった。だが「好漢組」は金もうけに目のない人ばかりで、自分の畑でなら骨身をおしまず働

くが、他人の畑の時は油ばかり売り、おたがいに損得のことでしばしば口げんかした。「互助」とは見せかけで実は個人経営となんら違わなかった「好漢組」は、まもなく解散してしまった。

一方、「老幼組」は困難を克服するため、全員が心を一つにしてがんばった。畑を耕す役畜がいなければ人力でプラウを引き、肥料を運ぶロバや馬がいなければ一カゴ一カゴと肩にかついだ……。秋になると、かれらはついに史上かつてない好収穫をおさめたのである。力の弱い「老幼組」が力の強い「好漢組」に打ち勝った事実を見て、互助組を疑っていた多くの農民もすっかり感心して、つぎつぎと「老幼組」に参加してきた。こうして、大寨の互助合作化運動に確固たる基礎ができあがり、1949年になると、全村69戸のうち49戸が「老幼組」に参加したのである。

互助組は、単独経営の小農経済に比べれば、合作という点でかなりの優越性をもってはいるが、土地の私有を基礎とする集団労働の組織にすぎないので、生産発展の要求には適応できない。早くも1943年に、毛主席は次のように指摘した。「農民大衆についていえば、かれらのあいだで何千年らいつづいてきたのは、一家族一世帯を一つの生産単位とする小私有経済であった。このような分散的な小生産こそ封建支配の経済的基礎であって、農民を永遠の貧困におとしいれてきたのである。このような状態を克服する唯一の方法は、しだいに集団化することであり、集団化を達成する唯一の道は、レーニンがいっているように、協同組合の道をへることである。」

中国の農業合作化運動は、初級から高級へ発展してゆく三つの段階をへており、互助組、初級農業生産合作社、高級農業生産合作社は、この三つの段階に適応する三つの組織形態である。互助組は社会主義の萌芽といわれる一種の集団労働の組織であり、互助組に加入した農民は互いに労働力と役畜の使用を交換するだけで、土地はやはり個人の所有になっている。初級農業生産合作社は労働に応じた分配をするほか、個人所有の土地や役畜、大型農具などは出資の形で合作社に渡して統一的に経営され、一定の配当が与えられる半社会主義的な性質をもつものであった。高級農業生産合作社は、完全に労働に応じた分配を実行し、土地とその他の主要な生産手段も集団所有に切り換えたので、完全に社会主義的性質をもつものとなったのである。

1951年9月、毛主席自らの主宰で『農業生産の互助合作についての中共中央の決議（草案）』が制定され、同年12月全党に配布された。農業生産合作化運動は、たちまち全国にくりひろげられた。大寨の「老幼組」の人びとも、初級農業生産合作社づくりの申請書を県に提出したが、なかなか認可が出なかった。なぜなら、そのとき党内の要職にあった劉少奇が修正主義路線をおしすすめ、公然と農業にたいする社会主義的改造についての毛主席の路線は「誤った、危険な空想的農業社会主義思想」であると中傷し、合作化運動の展開を極力こばもうとしたからである。山西省と昔陽県にも劉少奇の路線を実行する一部の幹部がいて、一連の規則や戒律を定め、合作社をつくろうとする農民たちをおさえつけた。「老幼組」の申請書も「役畜がない」という口実で、握りつぶされたのだった。だが、陳永貴と「老幼組」の貧農・下層中農は何回となく県城へ足をはこび、道理にもとづいて力説した。その甲斐あって、初級農業生産合作社づくりはついに認められたのである。

合作社は成立したが、それでもう風波がおさまったというわけでもなかった。合作社を目のかたきにする大寨の富農分子は、機会さえあれば破壊にのりだそうとしたし、資本主義思想にこりかたまったごく少数の単独経営の人も、いろいろと合作社を妨害し、その失敗に期待していたのである。ところが、新しく生まれた合作社は、その威力を大いに発揮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

し、成立の年にもう大豊作をおさめ、単位面積の収穫高は、単独経営の農民の誰よりも高かった。その結果、思想的にわりあい立ち遅れていた一部の農民は教育され、階級敵の陰謀も暴露されて、合作社はもとの49戸からいっきょに70数戸に発展したのである。1954年の末には、全村の農民がすべて合作社に加入したので、集団の力はいっそう強くなった。そこで1955年の冬、大寨の農民たちは初級農業生産合作社を高級農業生産合作社に変えて、集団化への道をもう一歩前進させたのである。

1958年、全国に大躍進の情勢があらわれ、人民公社がつぎつぎに生まれた。そこで、大寨の周辺にあるいくつかの高級農業生産合作社も連合して、大寨という名の人民公社を作り、もとの大寨はこの公社の一生産大隊となった。合作社と比べれば、人民公社は集団化の程度が高くて規模も大きいし、自然災害の克服と大自然の改造に必要な力も強いので、生産の発展にはいっそう有利なのである。

六十年代の初期、中国人民はきびしい試練をうけた。国際的にはソ修裏切り者集団が、連続三年の自然災害に見舞われた中国の一時的な困難に乗じて、契約の破棄や専門家のひきあげといった工業に打撃を与える手段で、中国を屈服させようと企んだ。国内的には劉少奇一味が、「三自一包」（自留地を多くのこし、自由市場を多くもうけ、損益ともみずから責任を負う企業を多くつくり、農業生産の任務を一戸ごとに請負わせること)、「四大自由」（高利貸しの自由、経営の自由、雇用の自由、土地売買の自由）といった代物を農村に広めて人民公社をぶちこわし、資本主義を復活させようとしたのである。だが大寨の農民たちは、ものすごい勢いでかぶさってくるその圧力をおしのけ、断固として「三自一包」に反対し、「四大自由」をボイコットした。同時に、かれらはたえず資本主義と修正主義を批判し、集団経済の発展に力を入れ、国家を支援するため、より多くの食糧を生産しようと努めた。

1964年、偉大な指導者毛主席が「農業は大寨に学ぼう」という呼びかけを出したことで、社会主義の道をあゆむ大寨の人びとの信念はいっそう確固たるものとなった。

この年、中国の農村では社会主義教育運動がくりひろげられた。この運動は、農村の各級組織の政治面、思想面、組織面、経済面から不正を一掃するもので、「四清」といわれた。それは社会主義と資本主義との闘争であり、その重点は党内におけるひとにぎりの資本主義の道をあゆむ実権派に置かれた。運動の初期、大寨に派遣されてきた「四清工作隊」は、劉少奇の修正主義路線を実行した。かれらは村に入ると、資本主義勢力の肩をもつ一方、社会主義の道を堅持してきた陳永貴同志とその他の幹部にいろいろな罪をなすりつけて包囲攻撃し、あの手この手で合作化以来大寨のあゆんできた正しい道を否定した。このような日々にも、大寨の幹部と大衆はしっかりと団結して毛主席の著作を熱心に学習し、毛主席の教えで工作隊の言動を点検するとともに、自分たちの行動の指針とした。40日以上にわたる闘争の結果、大寨の人びとはついに勝利者となったのである。

1966年、偉大な指導者毛主席は、史上かつてないプロレタリア文化大革命をひき起こした。全国を席巻するこの大革命の中で、大寨の人びとは全国人民といっしょに劉少奇と林彪の二つのブルジョア階級司令部を粉砕したあと、つづいて、「四人組」反党集団とまっこうから闘った。「四人組」は権力さん奪の必要から、「大寨という赤旗の切り棄て」をその反革命活動の計画に組み入れたのである。「四人組」のひとり江青が、1975年と1976年の二回にわたり大寨にやってきて、大寨の幹部と貧農・下層中農をほしいままに侮辱し、社会主義に熱中することは生産力主義に走り、修正主義路線を実行するものだと、ものすごい剣幕で中傷した。にもかかわらず、大寨の人びとは悠然たる態度でそのデタラメな言い

がかりに反論し、毛主席が自ら立てた赤旗を守りぬいてきたのである。

それからまもなく、「四人組」反動集団は粉砕され、かれらを糾弾する高まりが全国的に盛り上がった。大寨の人びとも積極的にこの闘いに身を投じている。

三十年あまりの間、大寨人民はこのように闘争の中でたえまなく前進してきた。もと党支部書記の陳永貴同志がいった通り、まさに「このような闘争がなければ、修正主義は台頭し、資本主義は復活し、人びとの思想は後退し、社会主義は建設できない」のである。だからこそ、大寨の道は闘争の道だったのである。

困難にみちていた初期のころ

昔陽県の県城から東南へ伸びる道を5キロほど行くと、武家坪という生産大隊につき当たる。そこを通りぬけると、すぐ目の前に現われるのが大寨村である。

村に入り、まず目に映るのは整然と並んでいる石づくりの窰洞とカワラぶきの家屋である。これらの窰洞と家屋は山腹に沿って建てられており、遠目にはまるで数階建てのビルのように見える。これが公社員たちの住宅である。村の真ん中にはアスファルト道路があって、その両側に青々とした柳の並木が茂り、新華書店、郵便局、銀行、生活用品や生産工具の販売店などが軒を並べている。虎頭山を眺めると、ふもとから中腹へとだんだん畑が幾層も重なり、トラクターがそこを耕している。山頂はと見れば、ここ数年らい植樹した松や柏が緑一色を呈している。山腹に見える用水路は約7キロあり、まるで虎頭山の中腹に銀色の帯をしめたようだ。山のところどころには丸い貯水池があって、遠目には山腹にはめこまれた鏡のように見える。尾根伝いに上から下まで、何本もの運搬用ケーブルが架設されている……。今日の大寨は、いたるところに生き生きとした情景がみられるのである。

新旧二つの大寨の間には、わずか三十年のへだたりしかない。しかし、その変貌ぶりは、ここ数百年間にも見られなかったものである。それは、解放された大寨の農民が中国共産党の指導のもとに、毛主席の正しい路線を貫徹し、集団経済の力にたよって、刻苦奮闘してきたたまものなのだ。

1953年、大寨の初級農業生産合作社が成立したとき、陳永貴同志は農民たちといっしょに「耕地造成十ヵ年計画」をたて、虎頭山にある七つの谷と八つの尾根をだんだん畑に改造することにした。

計画をたてた年の冬、大寨の人びとは耕地造成の手始めとして、まず「白駝溝」を改造することにした。かれらは18日間で谷間に24本の石垣を築きあげ、あわせて三分の一ヘクタールほどのだんだん畑を造成した。これは、大自然を改造する事業としては、合作社成立後におさめた最初の成果であった。この成果にちなんで、大寨の人びとは「白駝溝」を「合作溝」と呼ぶことにしたのである。

その後、大寨の人びとは2年たらずのうちに、「後底溝」、「麻黄溝」など五つの谷を改造し、1955年の春までに、七つの谷のうちの六つを改造してしまった。

それでも、大寨の人びとは足どりをゆるめなかった。1955年の冬、かれらは最後の難関である狼窩掌溝の改造にとりかかったのである。全長1・5キロもある狼窩掌溝は、七つの谷の中でもいちばん長いだけでなく、谷が深く傾斜も急なため、雨季になるとしばしば山津波が起こる。これを改造するには、かなり大きな力を注ぎこまなければならない。かれらは酷寒をものともせずに、まる一冬がんばって38本の石垣を築き、数万立方メートルの土を運んで、谷間に1ヘクタールあまりの耕地を造成した。ところが翌年の夏、洪水に石垣がくずされ、農作物もすっかり流されてしまったのである。しかし、大寨の

人びとは決して気を落とさなかった。その年の冬、かれらはふたたび石垣の構築にとりかかった。今度は土台を前よりも深く固め、石垣自体も大きな石で積み上げた。そのほか洪水をくいとめる措置として、谷間の上手に小型の貯水池をつくっておいた。ところが、1957年にもひどい集中豪雨に見舞われ、貯水池と、修復したばかりの石垣がともに洪水に押し流されてしまった。そのとき、村の階級敵はかげでほくそ笑み、合作社の社員のあるものは狼窩掌の改造に自信をなくしてしまっていた。そこで党支部は、社員たちをはげまして、毛主席の『実践論』を学習し、経験と教訓を総括するようすすめ、三たび狼窩掌を改造する新しい計画をつくり上げた。1957年の冬、大寨の人びとは三たび狼窩掌の征服にのりだした。かれらは、どんなに大きな圧力がかかってもつぶれない窰洞やアーチ型の石橋からヒントを得て、狼窩掌の谷間にある38本の石垣をアーチ型につくり直したうえ、土台を前よりも深く掘り、石垣自体も底辺の広い三角状に積み、石と石の間に砂利をつめてセメントで固めた。こうして、狼窩掌はついに征服されたのである。七十年代に入ると、かれらはさらに狼窩掌のだんだん畑を小平原につくりかえた。

こうして大寨の農民たちは、合作化実現後の10年間に、苦労をいとわぬ不撓不屈の精神で七つの谷と八つの尾根を改造し、4700枚にわかれていた土地を2900枚につくり直し、耕地造成十ヵ年計画を完成させたのだった。

大寨は災害の多いところで、ほとんど毎年のように大小の災害に見舞われる。耕地造成十ヵ年計画を完成したばかりの1963年に、大寨は壊滅的な大水害におそわれた。その年の夏、十年がかりでつくりあげた耕地が七昼夜降りつづいた大雨に流されてしまい、農作物はほとんど全部水浸しとなり、97パーセントの家屋が倒壊してしまった。社会主義の集団経済に重大な損失があらわれると、資本主義の勢力はかならず頭をもたげるものだ。ある反動的富農分子が、しきりに悲観的なことばをいいふらし、公社員たちをよその土地へ逃げださせようとした。だが、十年間も合作化の道を歩んできた大寨の人びとは、集団経済には困難を克服する力があることをかたく信じ、陳永貴同志を中心とする党支部のまわりに結集して、自力で生産の回復と村の再建をしようと決心した。かれらは、政府から四回も救援物資と救済資金を提供するといわれたが、「救援物資や救済資金は一時的で限られたものだが、自力更生の精神は永久に使い果たせないものだ」といってそれをことわった。かれらは一致団結して災害から立ち直るためにたたかった。全村の老若男女が総動員で、昼は野良に出て荒らされた作物の手入れや畑の整理をやり、夜は家屋や窰洞の修復をやった。こうして苦戦すること2ヵ月、秋になると、またしても豊作をかちとり、国家に売り渡す食糧や集団の備蓄食糧、および公社員に分ける自家用食糧のいずれも、前の年の水準を保つことができたのである。

災害を克服したのち、大寨の人びとは急速に生産を回復させ、新しい大寨村をつくりあげた。つづいてかれらは、今後のより大きな自然災害に備えるため、さらに大がかりな農地の基本建設にとりかかった。公社員たちは、まず改造された2900枚の耕地を1500枚にまとめ、七十年代の初めには「人工平原」の造成に着手して、半分以上の耕地をトラクターで耕作できるようにつくり変えた。また虎頭山の中腹に用水路を掘り、貯水池の建造、水路橋の架設、大小さまざまな引水パイプの敷設といった水利工事をすすめて、耕地の75パーセントをかんがいできるようにした。そのうえ、たえず土壌の改良をおこなっているので、ほとんどの耕地が水には困らず、肥料や土壌の流失しない、安定した多収穫の畑に改造されたのである。

大寨の人びとは、このように一年また一年と汗水ながして、ついに山河の姿を一新させた。食糧の収

穫高は解放前のヘクタール当たり0.75トンから7.5トンにふえ、とくに1976年には8.4トンにまでたっした。生活が豊かになっても、大寨の人びとは刻苦奮闘の精神を失ってはいない。かれらの働く目的は、大寨一つの村、一つの生産大隊が豊かになるためではなく、社会主義の中国をいっそう繁栄させるためなのである。

大寨の新しい型の農民

この写真集で、読者のみなさんは、大寨の人びとの労働と闘争の場面や、多くの大寨人の雄姿を見られることだろう。熱情にみちあふれ、大寨の人びとを率いて社会主義の道をあゆむ老支部書記、闘争のなかで成長してきた生気はつらつたる新しい世代、ハンマーをふるって岩石とたたかう白髪の老英雄、てんびん棒を肩に飛ぶように走る健康な娘たち……。かれらは新しい大寨の建設者であり、中国の新しい型の農民でもあるのだ。

解放前、数千年にわたる私有制のもとで生きた中国の広はんな農民は、搾取階級の政治的抑圧と経済的搾取をうけたばかりでなく、精神的にもその旧思想に束縛されていた。解放後、封建制度は一掃されたとはいえ、私有制の伝統的観念と数千年にわたる旧思想の因習はまだ残っている。農民たちをこうした束縛から解放するには、各級の党組織が「重大な問題は農民を教育することである」という毛主席の教えにもとづいて、旧思想の因習を打ちくだき、私有制の伝統的観念から決別するようたえず農民を組織し、教育しなければならない。そうしなければ、うちたてられた社会主義経済を強固にし、発展させることはできないのである。

長い間、大寨の党支部は、気をゆるめることなく農民に思想教育をおこない、旧思想、旧観念をすてて、新思想、新風俗を身につけるようしむけてきた。いまでは、かれらは大寨だけでなく、全中国人民のこと、全世界の被抑圧人民のことを考えるようになったのである。

大寨の人びとは、数々の共産主義的な輝かしい業績をあげている。ここでそのいくつかの例をあげてみよう。

六十年代の初め、劉少奇が「三自一包」「四大自由」をおしすすめたために闇市がはやり、農産物の値段がどんどんあがっていた。そのとき、大寨の人びとは流れに逆らって自分の生産隊にある1万5000キロあまりの食糧、2万5000キロあまりの飼料を、国家の規定した価格で、不足している生産隊にゆずったり貸してあげたりして、その困難克服を助けたのである。

1972年、大寨はひどい干ばつに見舞われ、食糧の収穫高が前の年に比べて13パーセントも減少した。規定によると、減産した場合は、国家に売り渡す量もそれに比例して減らしてもよいことになっている。しかし、国家の利益を優先して考慮する大寨の公社員たちは、個人用の食糧を235キロに切り下げ、一人当たり35キロ節約して国家におさめることを全員一致で決めた。その結果、国家に売り渡す食糧はあわせて20万キロとなり、豊作だった1971年よりも25パーセント上まわったのである。

1972年から1973年にかけて、昔陽県は17ヵ月間にわたる大干ばつに見舞われた。そのため、多くの生産大隊が水不足になやまされ、春の種まきもできない状態だった。大寨大隊には山をめぐる用水路があるので、水不足になやむことはない。ところが、大寨の人びとはこの用水路の水を下流の生産大隊にゆずり、自分たちは総動員で水をくみ、種まきをしたのだった。こうして、大寨大隊も他の生産大隊もみな、時期をのがさずに種まきをやりおえることができたのである。

解放前だったら、普通の農民にこんなことができるなどまったく考えられないことだ。しかし今日の大寨では、だれでも喜んでやるのである。なぜなら、

かれらは新しい型の農民になったので、こうやるのは当然のことだと考え、こうしないのは恥ずかしいことだと思っているからだ。

滅私奉公という面で、大寨の党支部のメンバーは大寨農民の手本だといえる。

大寨の党支部のメンバーのなかには、1947年の支部成立以来の支部委員である老同志もいれば、プロレタリア文化大革命のなかで成長した若い同志もいる。老幹部であろうと新しい幹部であろうと、いずれも自己をきびしく律し、私利私欲に走らず、片時も集団の生産労働から離れようとしない。前の支部書記陳永貴同志は、1975年に上京して、党と国家の指導的職務をうけもつようになってからも、時々大寨にもどって来ては社員たちといっしょに労働し、語りあい、勤労者としての本分を守りつづけている。陳永貴同志のあとをついだ党支部書記、党の第十一回全国代表大会で中央委員候補に選ばれた郭鳳蓮同志は若い女性で、もとは大寨の「鉄姑娘隊」の隊長であった。かの女もまた、先輩たちのように毛主席の革命路線を忠実に実行し、名利をはからず、苦労をいとわず、大寨の人びとを率いて前進しつづけている。

中国は8億の人口をもっているが、そのうちの7億を農民が占めている。したがって、中国の農民にどのような道をあゆませ、中国の農業をどのような方向に向かって発展させるかは、きわめて重要な問題である。全国がまだ解放されていないとき、偉大な指導者毛主席はすでに中国の農業発展の道をさししめしていた。大寨の農民は、自分たちの実践を通じて、毛主席のさししめした道は、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義の農業を発展させる唯一の道であることを立証したのである。

1964年、毛主席は「農業は大寨に学ぼう」と呼びかけた。7億農民の要求と願いがこめられているこの呼びかけは、農民の根本的な利益を代表しており、大寨に学ぶ運動がただちに全国にくりひろげられた。1966年、プロレタリア文化大革命が始まると、この運動はいっそう幅広く発展した。1975年に、農業は大寨に学ぶ第一回全国会議が開かれてから、大寨に学ぶ運動は新しい段階に入り、全国に大寨式の県を普及させる運動がもり上がった。「四人組」はこの運動を目のかたきにし、いっせいにとび出して猛反対したが、全国の広はんな幹部と大衆は断固たる態度でかれらとたたかい、その妨害をはねつけた。1976年になると、もとからある300あまりの大寨に学ぶすぐれた県がいっそう強固になり、高められたばかりでなく、さらに100あまりの大寨に学ぶ先進的な県があらわれたのである。

「四人組」が粉砕されたあと、華主席と党中央の配慮と指導のもとに、農業は大寨に学ぶ第二回全国会議が開かれた。この会議では、「四人組」の権力さん奪の陰謀活動と、大寨に学ぶ運動を妨害する犯罪的行為が批判された。同時に、各地における大寨式県の普及運動、農業機械化の推進状況を点検し、その経験を総括した。最後に大会は、毛主席の指示で、周総理が第四期全国人民代表大会に提出した「今世紀中に中国を偉大な社会主義の強国に築きあげよう」という雄大な計画を実現するため、一歩すすんで大衆を立ちあがらせ、農業は大寨に学ぶ運動と大寨式県の普及運動のテンポをはやめて、国民経済の全面的な発展をうながすよう、全党に呼びかけた。

目下の大寨式県を普及させる運動は、土地改革、農業合作化、人民公社化のあとをつぐ、中国の農村におけるいま一つの偉大な革命運動であり、社会主義革命を深くおしすすめ、社会主義建設をはやめる7億農民の偉大な進軍でもある。この運動は、すさまじい勢いで中国の広大な農村にひろがっている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com